



復活篇

帝都物語 10

荒俣宏

KADOKAWA NOVELS

帝都の大地霊・将門の正体とは？

今、時代は終焉を迎えるのか……。

書下しサイキック伝奇ノベル完結篇！

角川書



カドカワパブリズ

昭和六十二年七月二十五日初版発行

著者 荒俣宏
あらまたひろし

発行者 角川春樹

ていともものがたり
帝都物語 10 復活篇
ふっかつへん

印刷所 暁印刷株式会社

製本所 本間製本株式会社

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見三二三 振替東京三一九三〇八

千一三三 電話 営業〇三二三八八五三 編集〇三二三八八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

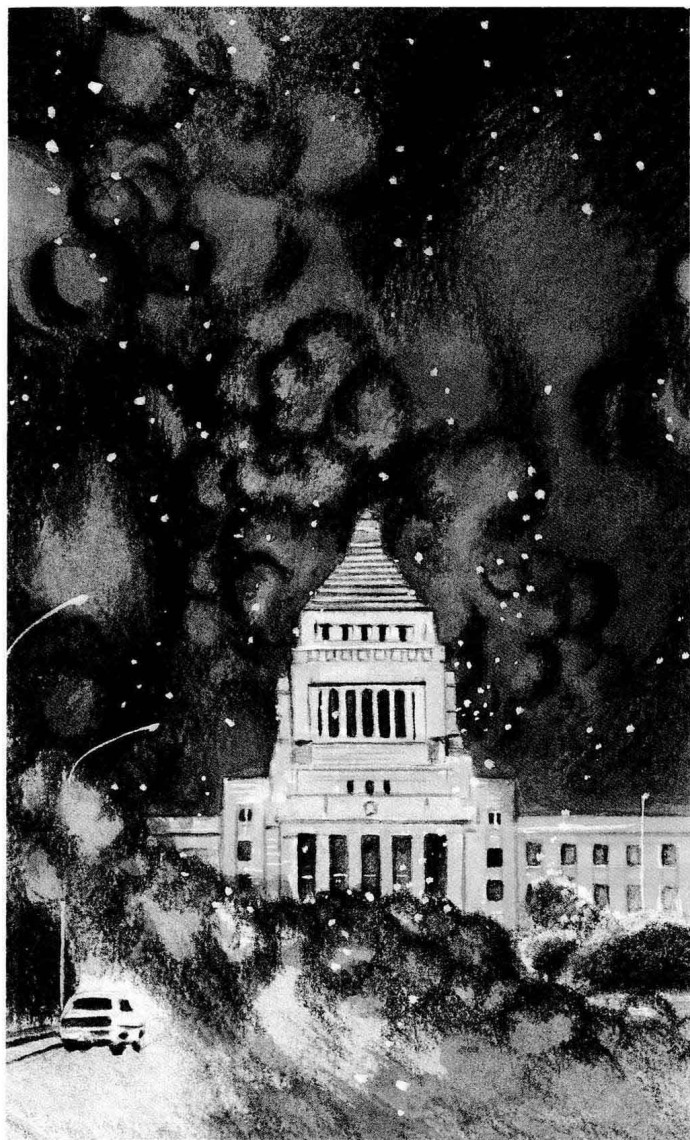
ISBN4-04-777810-9 C0293

The background of the entire image is a traditional Chinese ink wash painting of plum blossoms. Dark, gnarled branches with small, light-colored blossoms are scattered across the frame, creating a delicate and artistic backdrop for the central text.

江苏工业学院图书馆
藏书章







KADOKAWA NOVELS

帝都物語10

復活篇

荒俣 宏

1 絵・口絵・本文イラスト／丸尾末広

目次

序

海竜の目覚め

13

巻一

破滅の予兆

22

巻二

加藤保憲、破壊鬼と化す

58

巻三

震災の一夜

101

巻四

土師一族の挑戦

144

巻五

魔の中枢へ

194

エピローグ

鎮魂

250

帝都物語を終えて 荒俣宏 VS 丸尾末広

前巻までのあらすじ

加藤保憲はついに最後の魔術を解き放った！昭和七十三年夏、東京破壊に執念を燃やすこの軍人は、隅田川にひそむ妖怪たちを引き連れ、冥界から喚びかえされた辰宮由佳理を幽閉する奇怪な豪邸へ攻撃を開始した。

六月にはいり、加藤の攻撃は開始された。彼の陰謀を邪魔する由佳理の亡霊と、彼女を呼びだした老人とを、一気に討ち亡ぼす目算であった。しかし目方恵子のあとを継いだ大沢美千代や団宗治らの抵抗に遭い、攻撃は失敗する。彼等はコンビュータ・テクニクを邪霊除けに応用し、奇想天外な装置を開発して式神をも撃退する。加藤保憲の怒りは頂点に達した。

さてそのころ、地球滅亡の霊告を受けた宇宙大神宮の大宮司角川春樹は、破壊されていく東京を怨霊たちの巨大な墓陵とすることを決意し、古代から連綿と墓陵の造成や守護にたずさわる土師一族の若い棟梁、土師金鳳に東京の霊鎮めを命じた。金鳳は、東京を桜の山にすることこそ、怨霊を鎮める唯一の方法と考えていた。だが、ことさらに将門の霊を挑発する加藤保憲とは雌雄を決しなければならぬ。彼は浅草に奇門遁甲の術を仕かけて魔人待った。

しかし、魔人加藤保憲は屈しなかった。三島由紀夫が冥界へ携えていった妖刀関孫六を入手し、東京を襲う邪霊を排除するために建てられていた都市守護の神像たちを次々に破壊する。これで地霊は必ず目覚めると確信した軍人は、彼の陰謀の最後の仕上げとして、東京湾に棲む海竜を討ちに向かった。海竜の胴を断てば、巨大地震は必ず発生するのだ。だが運命のその日、銀座では別の事件が起ころうとしていた。ひょんなことから最愛の女性由佳理の亡霊と対面した鳴滝が、彼女を永遠に地上に幽閉しようとして、銀座ミニチュア街の完成を急ぎだしたのだ。ミニチュア街の一部が完成すれば、それに応じて現実の銀座の一部が破壊される。そのために事故が多発し、死者も急増していった。そうした鳴滝の狂気に絶望した二美子は、ビルの屋上から身を投げて死ぬ覚悟を固める。胸さわぎを覚えた大沢美千代と団宗治が、現場へ急行しようとしたそのとき、東京じゅうの誰もが恐れ、しかし待ち望んでいた巨大地震が東京を襲った！

東京百五十年の歴史は、いまここに閉じようとする――。

〈主な登場人物〉

平将門

平安期関東最大の英雄、中央政權に刃向かい、関東を独立国家化したため討伐されたが、その一生は関東ユートピア設立のためにささげられた。すでに千年間、東京の中心を鎮護しつづけてきた大地靈だがついに永遠の眠りから覚める。

加藤保憲

明治四十年から帝都完全崩壊をもくろんできた怪人。陰陽道、奇門遁甲に通じ式神、水虎をあやつる。一度は「将門の靈」との戦いに敗れ、満州へ去ったが中国の秘術「屍解」によって不老不死となり、再び東京へ舞い戻り自衛隊員となる。百歳を越えながら三十代の若さを保ち、妖刀「関孫六」をふるい東京湾の海底に眠る地竜を目覚めさせ、再び東京に大地震をひき起す。

鳴滝純一

理学士。故辰宮洋一郎の旧友で帝都破

壊を阻止するために活躍した。九州で道教の秘薬

“人胆”を手に入れ巨富を築き、戦後東京にもどる。

百歳を越える老齢であるが、全財産を投じて自宅の地下室に、震災前の銀座煉瓦街を復元し、その次元の異に故辰宮由佳理をおとし入れることに成功する。

辰宮由佳理

鳴滝の旧友、故辰宮洋一郎の妹。鳴

滝がしくんだ次元の異につかまえられ亡霊として鳴滝邸の地下室によみがえる。

鳴滝二美子

鳴滝純一の養女。团宗治、大沢美千

代らと協力して帝都崩壊を阻止してきた。また、多くの犠牲者を伴う鳴滝純一の銀座街復元に心を痛め、身を投げうって鳴滝に中止をせまる。

梅小路文麿

華族出身の文官。大地震によって崩

壊寸前の東京の遷都卜占と引き換えに「将門の首塚」の秘密を加藤に明かす。

团宗治

托銀事務センター電算室の次長。幸田露

伴と三島由紀夫を心の師と仰ぎ魔術と文学に深い興味を持つ。コンピュータを駆使し、大沢美千代た

ちと協力して、帝都崩壊を阻止すべく水虎、式神と激闘を繰り広げてきた一人。

大沢美千代 長野県の山村から目方恵子によって東京に呼び寄せられる。三島由紀夫の転生として昭和四十五年十一月二十五日の午後三時に、この世に生をうける。東京では托銀事務センターに勤めるかたわら、故目方恵子の後継者として魔人加藤保憲と対決し帝都崩壊を阻止するため、団宗治らの協力を得て闘ってきたが、ついに三島の転生を自覚する。

目方恵子 東北にある神社の宮司の娘。東京の大地霊、平将門に仕える神女として魔人加藤を倒すため数々の戦いに挑んできた。自分の後継者として大沢美千代を選び神女の修業を積ませ帝都崩壊阻止を託しつつ、その一生を終えた。

鈴木力 奈須香宇宙大神宮〈破滅教〉の宮司。東京の守護霊を救うために角川春樹の処方を明し遷都を押し進める。

角川春樹 角川書店社長を突然辞任し、一時消息

不明であったが奈須香宇宙大神宮〈破滅教〉の大宮司として受けた「終末の霊告」をもとに遷都に全力を傾ける。また、自ら紫微大帝と名乗り宝剣を手に加藤と対決する。

土師金鳳 角川春樹により見出された土師一族の若き頭。川太郎党という古代土木工事職工集団を率いて、魔人加藤の野望を阻止するため命をかけた闘いを挑む。

政所利子（姉）**政所典子**（妹） 土師金鳳の下僕として働く川太郎党の姉妹。土師と共に加藤と闘う。
三島由紀夫 小説家。昭和四十五年十一月二十五日、市ヶ谷の自衛隊駐屯地で自決。その霊は地下に下り将門の霊と対決。将門の正体を明かせぬまま大沢美千代として転生した。

序 海竜の目覚め

その日、加藤保憲は関孫六をたばさんで晴海埠頭へ向かった。時刻は夕暮れに近かった。

タクシーに乗るとき、運転手が彼のいでたちを訝しんだが、軍服を着けていたせいで、剣を携えている言いわけは立ったようだった。運転手は黙礼して軍人を後部座席に迎え入れた。

車は音もなく市ヶ谷を発ち、混雑した道を縫って目的地へ向かった。車中では、加藤は無言を通した。もとより、運転手に語りかけるような話題などあるわけもなかったのだ。

晴海埠頭に到着したとき、海面は凪いでいた。死んだように凪いでいた。ただ、死後の世界にも似た淀んだ暑さがただよっていた。

加藤保憲はタクシーが立ち去るのをたしかめてから、岸壁のへりへ歩み寄った。波の音は聞こえない。どす黒い海面に、油の被膜だけが虹色の光を放っている。悪臭が鼻をつく。

軍人は足許を見おろして、かすかな笑みを浮かべた。しばらく経ってから、彼はそのまま岸壁伝いに歩きはじめた。海面に映じたかすかな影が、軍人のあとを追っていく。

やがて影は大きく曲りくねり、一隻のボートが落とす影と融合した。軍人はそこで足をとめ、ふ

たたび視線を海面に戻した。

一隻のボートがあった。静止して、まったく揺れもしない。船外発動機が赤く錆びついていた。加藤は関孫六を腰から引き抜き、トンとコンクリート面を蹴ってボートに乗り移った。瘦身を受けとめたボートは、静まりかえった海面でわずかに左右に揺れた。軍人はその揺れに身をまかせ、バランスをとるためにしばらく同じように揺れていた。やがて捨小舟の動揺がおさまる。加藤保憲は、手にした関孫六を櫂のそばにそっと横たえ、錆びついた船外機を撫でまわした。

船外機はとても役に立ちそうには見えなかった。何年も使用されずに放置されている。いや、というよりは、廃棄されて晴海に棄てられたと考えたほうがよさそうな、無残な小舟だった。

しかし軍人には勝算があるらしい。おもむろに白手袋を両手にはめ、神経質そうに瘦せ尖った指先を舵のようにうごめかせると、白い軍服の胸ポケットからハンカチを一枚引きだし、三角に折りたたんで海面へ投げつけた。

一瞬だけ海面が乱れ、そのどす黒い海水は純白の布地を呑みこんだ。ハンカチはゆらゆらと揺れながら水没していく。加藤保憲の鋼鉄じみた灰色の瞳に、ふしぎな白い点がいつまでも映っていた。ハンカチが海水に呑まれたあと、軍人は腕組みして待った。

待った。

夕陽が赤かった。海上バーナーの橙色の炎が不安気に揺れながら燃えていた。待った。

そして海面にポツカリと円形の紋が浮かびあがったとき、彼の冷やかなくちびるに無表情な笑みが咲いた。

水紋が一つ、また一つ、海面にあらわれる。丸い輪だ。その輪が音もなく小舟の後方に寄りつき、やがてボートを岸壁から押しやった。

油の浮いた海面に航跡を残しながら、加藤保憲を乗せた小舟は沖をめざして滑っていく。うしろのほうで、例の水紋が何度もあらわれては消える。

——フフ……

と、加藤は忍び笑いした。たびかさなる襲撃失敗のため大陰陽師の逆鱗にふれた水虎たちは、たかが小舟を沖へ押し出すだけの仕事だというのに、死ぬほど緊張している。軍人はそれを察し、また嘲うのだった。水虎たちは恐れていた。鬼人加藤保憲をこれ以上怒らせれば、彼等自体の生命もあやうくなることを、よく心得ていたのだ。だから小舟の動きがいつになくぎこちなかった。滑るように水面をすすんではいても、ときおりゴツンという不快な動揺があった。

加藤保憲は、動揺を感じとるたびに忍び笑いした。水虎たちに押されて、小舟が沖へ出ていく。港湾のあちこちに気の早い照明がともりだしている。しかし周囲はまだ明るく、夕暮れの気配は感じられなかった。

小舟は十五、六分間すすみつづけた。はずみをつけて水を蹴る水虎が、ときおり海面から黒い頭頂を現わす。しかし、かすかな水音を除けば、海上は信じられぬくらい静かだった。加藤保憲がボ